

園部秀雄女史・・・改訂

数年前なんでも鑑定団に、おじいさんが堀田捨次郎でという人が出演したが、お宝は二束三文であった。昭和4年天覧の全日本剣道選手権があり、このとき、ベスト・エイトに残った人である。・・・この場に堀田捨次郎を知る人がいなかった。

明治29年に京都で武徳会が発足し、剣術と柔道が隆盛であった。発足当初から剣術の部で5連勝と常勝を誇り武徳会幹部が地団駄ふんでくやしがあったのが、園部秀雄女史である。薙刀で、並入る強豪をすべて返り討ちにした女傑で、ボクは昭和30年代に90歳でまだ演武ができるほどの元気さで、「私の秘密」に出演しておられたのを覚えている。・・・伝記作家のなかには、生涯不敗と書いた人もあるのだが、これは鼻眞のひきたおしで、実は一度だけ敗れたことがある。明治20～30年といえば幕末の剣客の生き残りがまだ何人かいたのだがみな歳をとっている。たとえば、当時60歳を超えるとなると、今なら高齢者に分類されるのではないか。若い頃に錬兵館塾頭を勤め、何人か斬ってきて、晩年その自らが斬った人々の亡霊に悩まされたという渡辺昇子爵（大阪府の名知事といわれ、たとえば明石家万吉までがほめるほど優秀な人）が懇願されて試合をしたが、三本勝負で3本とも取られ、敗れた。のちに「千葉周作の娘も強かったが、園部はそれ以上だ。」と語ったというが、千葉周作の娘ではなく、弟の千葉定吉の娘でさな子といい、坂本龍馬の許婚である。みんな子爵の年齢（61歳）に同情を禁じ得なかった。「麒麟も老ゆれば何とやらというが、渡辺子爵もお年を取られたわい」観衆は園部女史に拍手も送らず、破れた子爵に同情して嘆いた。（筆者註：哀しいかな、子爵は、自分の年齢に気づいていない。ふたりを比べることさえ、無意味である。）

千葉さな子は、北辰一刀流の薙刀の型を完成させた唯一の女性であるが、明治29年、50歳で亡くなっている。

翌年も園部秀雄女史の独壇場で、もう誰も相手にならないのか、

と半ば不遜な態度であたりを睥睨している。このとき 28 歳。最も強い時期だっただろう。誰の顔を見ても自信のなさそうな顔で下を向く。そこへ、まだ若い青年がやおら立ち上がって準備を始める。観衆は、「あれは誰だ」「見たこともない青年だが」等々。囁く声と、なんとも形容のできないどよめきが大武徳殿に満ちた。当時の堀田捨次郎は、一無名の剣士、渡辺子爵の従者にすぎず、大会の名誉をかけて試合に出るなど、堀田氏自身夢にも思わなかつただろう。一般観衆がその名も知らないのも当然だった。園部女史は不満そうに、「何だどこの若僧だ。」と不平そうに呟いた。・・・女史の面上には怒りの色があらわに浮かんでいた。武徳会の上層部は血迷ったか、という次第である。・・・堀田氏が場内に紹介されるのを聞いて、「ふうん、そうか。渡辺子爵のお弟子さんか。・・・お気の毒だが返り討ちにしていあげよう。」・・・そして、数分後、高らかな面の音を響かせたのが園部女史の方であった。拍手をしてはいけない道場ではあるが、場内割れんばかりの歓声と拍手で大殿堂も揺るがんばかりだった。女子の頭上に六年ぶりに発した音だった。2 本目は気をひきしめて立ち合ったが、結果は同じ。これが堀田捨次郎さんの、19 歳の日の姿で、このときの園部女史の敗因は「取るに足らぬ若僧、と堀田氏を甘く見た、心のゆるみ」が最大の原因だった」とされている、と伝えられている。生涯唯一の公式戦の敗戦である。しかし、堀田さんも単なるブロックではなく、27 歳で教士の称号を得ている。最年少である。のちに範士の称号を得た。四十代に全日本選抜の剣士になっている。渡辺昇が、いずれ剣術で天下をとるかも知れない逸材だ、と惚れ込んだ人物である。

薙刀は強い。刃の部分も長いが石突きの方も使えるから、条件がいい。但し本当の達人でないにだめだが。

園部秀雄さんは、直心影流榊原鍵吉の兄と称した（まるきりの嘘）佐竹貫竜斎（いろいろ不始末をしでかして鍵吉のところに転がり込んでいた御家人くずれだが、腕は立った）が日本中を撃剣興行でまわっているとき、仙台にきたときに弟子入りした。初めは剣術も稽

古したが、薙刀の天才であることに気づき、以後薙刀術で試合に出場した。その縁でのちに鍵吉にも教えをうけた。だから、「直心影流」の薙刀を称していたが、直心影流には薙刀の型はない。旧姓日下。数年後に結婚して、園部姓になった。(実は、園部秀雄女史は2回結婚しており、最初のご主人は、撃剣興行で師匠にあたる佐竹貫齋とともに日本中を旅していたとき、青森かどこかで天然痘に罹患し、亡くなられた。このときは、子供を抱えて大変な時期であった。)この夫妻の間では、試合をする時、真剣勝負ですか、夫婦としてですか、などという会話があり、真剣勝負では、一度だけ秀雄女史が敗れている、という。

園部女史の気力というか、強さは本物で、60歳近くになっても試合に応じて勝利をおさめている。

榊原鍵吉は、幕末、将軍家茂の希望で日本一の槍術家高橋伊勢守(幕末三舟のひとり高橋泥舟)との不利と言われる試合に勝って名を轟かせた。明治に入ってから生活の糧のない剣客のために撃剣興行をおこなったが、ある時から突然やめてしまった。(つまりは見世物なのだが、その伝でいくと、現在のプロ野球もそうである。)佐竹は、その後も日本中で撃剣興行を続けた。儲かるからである。そのお蔭で園部秀雄が誕生した。佐竹貫柳齋は、園部女史からみれば恩師である。

鍵吉は下谷車坂の道場で貧困の生活に甘んじた、つまり新政府の粟を喰まないで生涯を送った最後の剣客である。大変な荒稽古で有名で、鍵吉が稽古をつけると、道場いっぱい脳震盪を起した弟子がマグロのように転がっていたという。

幕末の剣客物語というと、必ず、榊原鍵吉が登場する。最期まで鬚を切らなかつたし、最後の武士の意地を貫いた。明治天皇の御前で、明珍の兜に三寸五分切り込んだ。当代随一の剣客であった。江戸(東京)で唯一の道場だったこともある。・・・以下別の稿で述べる。